

Literature of Boshin Hakodate Goryokaku Castle :  
The Story of Adherence to the Shogunate,  
Conversion, and Proletarian Realism

|       |   |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2017-07-28<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 河野, 基樹<br>メールアドレス:<br>所属:  |
| URL   | <a href="https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/890">https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/890</a> |

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 戊辰 函館五稜郭の文学

—— 佐幕・転向・プロレタリアリアリズムをめぐる物語 ——

河野基樹

## 1 北海道の文学

### 1・1 アイヌ文学

北海道の文学に言及しようとするならば、この地の元々の主人公たちの文学への挨拶は不可欠だろう。抄説するならば、口承により、ネイティブの文芸——《韻文の物語（ユーカラ）》や《散文の物語》は、伝えられてきたのであった。知里真志保『アイヌ文学』<sup>評1</sup>の分類に従えば、『韻文の物語』のうち、『神のユーカラ』には、カムイユカル（自然神謡）、オイナ（人文神謡）が、『人間のユーカラ』には、ユカル（英雄詞曲）、メノコユカル（婦女詞曲）がある。また、『散文の物語』に分類されるのが、カムイウエペケル（神の散文物語）、アイヌウエペケル（首領談）。さらに、右文芸の他にも、ウポポ（祭歌）・イヨシノッカ（子守唄）・サケハウ（酒謡）・ヤイサマネナ（情歌）・イヨハイオチシ（哀傷歌）などの《歌謡》、パナンペウエペケレ（川下男昔話）・シサムウエペケレ（和入昔話）・ポンウパシクマ（なぜなぜ話）などの《物語》の名称も、耳目に親しい。ユーカラの全貌が明らかになったのは、膾炙されているように、金田一京助の

採集と研究に拠るところが大きい。

### 1・2 近代以前の文学

近代以前の北海道文学の遺産は、広義の文学——見聞録、探検記、紀行・案内記、記録・報告などで占められている。「日本書紀」卷二十六、天豊財垂日足姫天皇・齐明天皇、阿倍比羅夫<sup>あべのひらふ</sup>のくだりに、「蝦夷」の名辞がある。その後、平安時代にかけて、その名は文献から久しく消えていた。しかし、平泉に奥州藤原氏が栄えた一二世紀になると、『歌枕』としてその名は再び定着する。下つては、文和四（西暦一三五六）年の小坂田忠「縁起絵詞」、寛永九（一六三二）年の松前広長「福山秘府」などに関連の記述が散見され、近松門左衛門や井原西鶴にも、同地に題材をとった作品がある。

### 1・3 近代の北海道文学

北海道という一地域の人間・社会・歴史を反映した近代の文学は、その基盤も十分に整い、発展を遂げてもいる。『北海道文学全集』（全二十二巻・別巻一）はその精華である。

近代北海道文学を概観するためには、どのような方途があらうか。和田謹吾は、「近代文学における地方性の問題——北海道文学の位置」<sup>(註2)</sup>において、大きく次の四つに分類することを試みている。①北海道を舞台にした作品群、②北海道の異国情緒を主とする作品群、③地理的自然環境に育まれた作品、④歴史的社会的環境に育まれた作品。

和田は右四分類のうち、有島武郎に発し、小林多喜二・本庄陸男・<sup>(註3)</sup> 木島健作・久保栄に象徴される第四番目の傾向、歴史・社会的文学の傾向が、これまで北海道文学の主流を占めてきたとする。中野重治も、「北海道の作家たち」<sup>(註3)</sup>において、右の者の名に加えて、小熊秀雄・<sup>(註4)</sup> 今野大力らを挙げ論考を加えている。「人の人たる道を実行上つらぬくという根本的な彼らの態度は、真の北海道にふさわしい」との中野言は重い。山田昭夫の「悲劇的精神系譜」の探求<sup>(註4)</sup>も、前記の作家たちに共通して見られる、「自己への誠実と社会への誠実とを一元化させた悲劇」に着目した点で、同趣旨の文章。

木島健作は、「文学的自叙伝」<sup>(註5)</sup>において、自分が「北方の人種」に属し、その血と運命とを早くから感じていたと語る。かつて繁栄を知らず、野にあり続けてきた北方の惨めさのことである。南の地を追われ、雪の辺土に住みついた遠い先祖を、「夢のやうな気持ちで考へる」と木島は述懐する。「北海道及北海道人」、「北海道と文学」にも、同じ思いの表白がある。これは、他の多くの北海道生れの文学者にも共有される感情であったらう。

もっとも、前出の北海道出身の作家の登場以前に、種を播いて去つた来道者たちの名を忘れることはできぬ。その何人かの名を列挙する。幸田露伴、国木田独步、葛西善蔵、徳富蘆花、鳥崎藤村、

石川啄木、岩野泡鳴、長田幹彦、鳴海要吉、田山花袋、<sup>(註6)</sup> 秋田雨雀。北の精神と抒情はその後、伊藤整・和田芳恵ら北海道出身者によりおもむろに充実する。その後の華麗な展開は、原田康子「挽歌」(一九五六年)ブーム、三浦綾子「氷点」(六五年)ブーム、渡辺淳一「阿寒に果つ」の流行に明らかである。

文学をも含むところの北海道文化の総体、世界に開かれたその普遍性に触れたのは、「プラキストン線の北」(「北の詩精神」)、<sup>(註6)</sup> 「北緯四十度圏の自然に近代西洋への憧憬を托したくなる」(「四十度圏の幻想」)<sup>(註7)</sup>と語った風巻景次郎であった。

## 2 函館の文学

函館の近代史は、安政元年のペーリー来航に始まる。安政六(一八五九)年、横浜・長崎とともに英・仏・露・蘭・米の五カ国との通商が開始される。一八七四年には、開拓使によって函館・青森間に定期航路が開設される。「箱館」の地名の謂われは、亨徳年間(一五世紀半ば)、河野政通が函館山に館を築き、その姿形が箱に似ていたことに因る。「箱館」が「函館」に改められるのは、一八六九年九月のことであった。

さらになお若干の函館近代文学抄史を試みたい。函館出身の亀井勝一郎に、「北海道文学の系譜」<sup>(註8)</sup>がある。「明治四十年二月六日私はこゝで生れた。先祖は嘉永末年の移住者。故郷の性格を見きはめたいと思ふ。さういふ気持ちの中には、自分の生の根源にふれたいといふ欲望がある」とある。勝一郎には他に、「東海の小島の思ひ出」<sup>(註9)</sup>「我が精神の遍歴」<sup>(註10)</sup>「はこだての風景」<sup>(註11)</sup>「私の文学経歴」<sup>(註12)</sup>などの関連の文章。また函館の勝一郎に触れる第三者のものとして、

河上徹太郎「函館と亀井君」がある。

インターナショナルな立地から、個性的な文学者や、国際性溢れる作品は目白押し之感がある。一九〇〇年生れの長谷川海太郎。一九年に単身渡米、二四年に帰国してからは、三つのペンネームを使い分け大衆文学を執筆した。筆名は、現代小説の分野では牧逸馬、時代小説では林不忘、<sup>はじふぼ</sup>「めりけんじやつぷもの」では谷讓次。〇二年の生れの久生十蘭。業績は、『全集』全七巻に総覧される。港町函館の浪漫をサスペンスの領域から描くのが、〇四年生れで、長く「新青年」の編集長を務めた探偵小説作家・水谷準である。

### 3 戊辰戦争終結の地・箱館五稜郭

箱館五稜郭の攻防は、戊辰戦争の棹尾をなす。その終結により、〈近代〉への扉は大きく押し開かれた。五稜郭は、安政四（一八五七）年、北方防衛の一環として、幕府により築城が開始される。普請掛は武田斐三郎。元治元（六四）年の竣工。日本初の西洋（オランダ）様式を採用。その名称は、本郭が星形であったことに由来する。大政奉還により、六八年四月、公卿・清水谷公考に明け渡された。一〇月、榎本武揚ら旧幕軍により再占領。一二月、当時にあつては先進的な試みである「選挙」が実施され、蝦夷共和国の誕生をみた。翌六九年五月、五稜郭は武装解除され、共和国は消滅、七月には開拓使が設置され、八月に蝦夷は北海道と命名された。一九一四年、城址は公園となった。

「五稜郭をめぐる物語」は、〈維新〉史をめぐる文学の華である。亀井勝一郎「函館八景」<sup>（註9）</sup>は、その一景として、「五稜郭の夏草」を選ぶ。「荒涼とした北海道らしさはこの辺りから始るやうに思はれる。こ

の思ひを一入深めてくれるのは夏草である。寂寥の風景に一人対するの思い、ものである。北海道の大地が、骨髄までしみこんでくるのはかゝる時であらう。子母澤寛の「春の雨」は、彰義隊に参加した御家人が上野から潰走し、五稜郭に立て籠って滅びていく道行きを描いたもの。「蝦夷物語」は、そのヴァリエーション。「行きゆきて峠あり」は、榎本武揚を主人公とする。久保栄「五稜郭血書」はその題名の通り、五稜郭での戦いをめぐる人間の生と死を描く。安部公房の小説「榎本武揚」。公房には、同名の戯曲「榎本武揚」もある。司馬遼太郎「燃えよ剣」は、箱館を舞台とする謂わば土方歳三物語。五稜郭攻防の様子は、河上徹太郎「革命前夜の人」にも描出される。

戊辰箱館戦争では、共和制の試みとともに、近代にのみ特有のさまざまな思想の萌芽がみられた。赤十字思想はそのひとつである。高松凌雲が院長を務めた箱館病院では、敵味方の区別なく治療が行われた。それを描くのが、吉川英治「函館病院」、榊山潤「五稜郭落つ」、柴田錬三郎「函館五稜郭」。

丹羽文雄には、五稜郭の描写場面から物語が始まる「暁闇」がある。江戸時代、松前藩では、交易権を富商に与えることで、「場所請負」の制度を経済統治の手段としていたが、塗炭の苦しみにあつた漁民たちは、慶応四（六八）年四月、穂足内<sup>（はたるない）</sup>で蜂起した。「暁闇」は、それを作品主題とする。一九四一年八月の「中央公論」に掲載された。作中における蜂起の記述は、「大東亜戦争」下の、労働問題に密かに通底する諷刺である。

#### 4 文学に現われた榎本武揚

榎本武揚は歴史上、その毀誉褒貶が最も甚だしい人物であった。『佐幕派の頭目』と目されたことを理由に、当人の書き残したものはもとより、現在に残される客観史料は極めて少ない。史料は、国立国会図書館憲政資料室所蔵の榎本武揚文書、函館図書館蔵の北海道巡回日記(写本)、黒田家蔵の北海道巡回日記のほか、榎本家蔵の何点かに限られる。二次文献も、小杉直道「雨窓紀聞」(一八七三年)、一戸隆次郎「榎本武揚子」(一九〇九年)、片山楽天「五稜郭史」(一九二一年)などにのみ永く頼られて来た。榎本像を初めて歴史科学的に捉えようとしたのが、加茂儀一の『榎本武揚——日本の隠れたる礎石』<sup>(註10)</sup>である。同書では、「今からみれば、イデオロギーの問題は(榎本に)欠けている」と但し書きされつつも、「幕末と明治という日本にとつての大きい試練の時代が生んだ一種の万能人」であり、「模範的良官」であつたとの、破格の評価が下されている。

榎本釜次郎武揚は、天保七(一八三六)年八月、江戸の生れ。オランダに留学の後、海軍奉行ならびに海陽丸艦長を経て、海軍副総裁に就任。戊辰戦争に際会して箱館へ脱出、五稜郭に拠つて新政府軍に抗した。赦免の後は一転して新政府下の官界に入り、ロシア駐在特命全権公使を皮きりに、通信・文部・外務・農商務の各大臣を歴任した。一九〇八年一〇月、七十三才で没した。子爵。謎多き人物であること、史料の少ないことは、しかし逆に、数多の文学者に對し、想像上の大きな沃野を与えることになっている。

#### 5 子母澤寛・久保栄・安部公房の五稜郭文学

文学的フィクションを構築する可能性と自由が広がっていることを利用し、榎本武揚・五稜郭攻防を独自の視点から描いて個性的なのが、子母澤寛、久保栄、安部公房である。

子母澤寛は、一八九二年二月、北海道石狩郡厚田村の生れ。本名、梅谷松太郎。両親と早くに離別、祖父・十次郎のもとに育つた。久保栄は、一九〇〇年三月、札幌の生れ。長じては、築地小劇場文芸部に入り、小山内薫に師事、土方与志の演出助手となる。三三年六月、築地第十年記念公演に當つて、自作「五稜郭血書」を千田是也と共同演出した。安部公房は一九二四年三月、東京に生れた。祖父母は北海道石狩川流域の開拓民であつた。

三人はいずれも北海道に所縁がある。そしてなにより、戊辰箱館戦争ならびに榎本武揚の物語を書いたという共通点を有する。しかし、当該の戦争・人物に対する評価と、創作意図・作法は、それぞれ全く異なつていた。子母澤寛は、佐幕の心情を大衆小説の筆捌きによつて描いた。久保栄は、プロレタリア・リアリズムの創作作法の忠実な援用によつて、安部公房は、思想転向の問題としてそれを取り扱うことによつて創作に就いた。

#### 6 子母澤寛「行きゆきて峠あり」

子母澤寛の祖父は、彰義隊の生き残りとして五稜郭に籠城、遂には道内の厚田村へと落ちて行つた。祖父の来歴は、子母澤の随筆「曲りかど人生」に詳しい。子母澤の得意とする、御家人蝦夷流離の物語の数々は、幼時に聞かされた祖父の回顧談の影響下に胚胎した。



「蝦夷物語」「厚田日記」「南に向いた丘」も、北の地にその生涯を終えた祖父への追慕が基調にある。極めつけは、作品「蝦夷物語」の次の言説。北へ落ちていく淪落の御家人たちの後姿の中から、子母澤は、育ての親である祖父の背中を見つけたようであった。

あ、私の祖父も行く。血刀を下げたままだ。どうして、早くあの刀を鞘へ納め、もう少し目立たぬようにしないのか。

「語りの審級」の事など全く無視した、子母澤自身の踊り上がるような叫びである。

尾崎秀樹は、「子母澤の維新ものが、一貫して江戸方に力点をおいて描かれており、そこに祖父の血につながる哀惜と共感の思いがこめられていた」（『鶴沼閑話』）と語る。徳川への〈義〉に殉じた者を、〈情〉の観点から大衆文学に結晶化させたと言えよう。子母澤はしかし、史実をむろん疎かに考えているわけでは決してない。〈維新〉研究に携わった在野の考証家に山崎有信という人物がいる。『彰義隊戦史』『大鳥圭介伝』『天野八郎伝』『幕末血涙史』を著した。子母澤は山崎に親炙、史実の裏づけを得た。ただ、その裏づけを基にしつつも、子母澤はあえて、「歴史上の素材をあつかうというよりも、その底にある心情的共感のうずき」（『子母澤寛の年輪』）を文学にするのだ。

「行きゆきて峠あり」は、六六年四月一日から翌六七年三月三日号にかけて「週刊読売」に連載された。右の長篇の執筆時、子母澤は七十四歳になっていたが、枯淡な語り口の中から現われてくる人間の瑞々しさは依然健在であった。

この長篇は、榎本釜次郎十七歳、昌平齋の学生の時分、素読吟味の試験に賄賂を使わなかったために落第するという所から起筆され、

その物語時間の下限は、箱館に政府を樹立したものの軍門に下り、身柄を東京へ送致され、辰の口にある糾問所へ入牢する辺りに設定される。多くの者の回顧談や、聞き書きがさまざまなかたちで挿入される。歴史への親近感を与えるこのような工夫が、なまじの客観小説を凌駕する臨場感をもたらした。

作品の最大の特徴は、後半になればなるほど、榎本の存在がむしろ措かれ、それ以外の人物が重視されてくるという点にある。柳川熊吉なる人物の扱いはその一例である。熊吉は、侠客・新門辰五郎と縁故のあった実在の人物。もともとは浅草花川戸の渡世人である。

戦さにおびえて逃げ廻りながらも町の人々はいっているそうだ。／「この節の戦さは、これ迄話にきいた事もねえ珍らしいもんだよ。仮に角力で云うなれば花角力、相談角力のようなもので、今日は何刻から何刻までの打合とかねて話をきめてお互いに嘶などをしてる由」／「どうも毎日内密で談判をしているらしい。箱館からは榎本武揚が出て来るし、此方からは黒田了介が出るそうだ」／満更嘘ばかりでもない。柳川熊吉の取持ちで、田島圭蔵と永井玄蕃を通じて黒田了介に達し、榎本に達していた事は事実である。「行きゆきて峠あり」（天戮）

両軍の秘密裏の交渉に際し、熊吉が連絡役を務め、戦争終結後には、放置されていた箱館軍兵士の屍体の収容に当たったことは史実にある。熊吉は、函館八幡宮の門前に暮らし、一九一三年まで生きていた。碧血碑の近くに、今も顕彰碑がある。さらに、物語の後半（備えあり）の節になると、この熊吉に加え、函館軍の副総裁であった松平太郎が、「一廉の人物」として焦点化されてくる。榎本に

対する評価の下落は明瞭である。

「そこで、おれ（松平）とおのし（榎本）、荒井郁之助、大鳥圭介、この四人の首で、果して外のもののはゆるしてくれるかな」

「卑怯者の汚名を身一つに帯びて平然と敵の軍門に下った（箱館奉行）永井玄蕃さんに相済まない。あの人がわれわれの懇願を受けてあれをやってくれたればこそ、箱館軍の敗勢が目の辺りにわかって五稜郭開城の段取りにこぎつけた。あの人が武士の名にこだわって、頑張られたんでは、われらはどうしようもなかった。敗兵箱館軍の命を助けたのは永井さんだ。あたしら、あの人のうしろに随いて行けあいなんだ」

糾問所入牢後の榎本はさらに、右の永井玄蕃、さらには大鳥圭介にさえも座を譲り、松平太郎こそが主役の趣きを持つ感がある。糾問所取り調べの中で松平は、増田（虎之助・海軍参謀）がそれとなく示す態度から、「あ奴らの中にはあたしらを助けようとしてる奴がいる」（『人生浮沈』）らしいことを察する。

しかしここでこれを口にしては、助かりたがっているとしても思われても癪だ、人間誰だって命の惜しいのは当たり前だが、さて土壇場で、これを云っちゃあちつとばかり見つともねえ、これ迄来て、まだ度胸が坐らねえと思われる。それに永井（玄蕃）さんのように、蝦夷軍の貧乏籤を一人でみんな引っぱって、只只無益の壮士達を殺したくねえために先ず弁天砲台を一番先きに敵に引渡して、箱館戦の終幕をひく切っかけを作った。しかも攻撃軍の参謀と内々密約を結んでおいて——そんな並の人間には出来ない業を無理に作った笑顔一つせすにすらすらとやっつてのけた永井さんのような人のいる前に、心の中の小さな

ほろを見せたくねえ—— そう思ったから黙っていた。恐らく榎本も同じような事を気づき、同じような考えをしたかも知れない。

右に窺われる如く、佐幕の心情から彼らに与しながらも、榎本に對する子母澤の評価は微妙である。幼時に聞いた、祖父の次のような言葉を、子母澤は憶えていたのであろうか。

おれ（子母澤の祖父・十次郎）はあの人（榎本武揚）は余り好きじゃあ無かった。どうも、肚にどっしりともう一本筋金が足りねえような気がしてな。一度斯うと定めたら、骨が舍利になってもそれを遣りとげる、武士の魂が骨になっっている人とは思えない。詰まりおのれの一命を託する人柄ではないと思つた。

（『蝦夷物語』）

## 7 久保栄「五稜郭血書」

久保栄の「五稜郭血書」は、五幕六場の戯曲。一九三三年六月、日本プロレタリア演劇同盟出版部から刊行された。<sup>（註15）</sup>この作品は、〈維新〉の歴史実質を、函館戦争を局面に、政治的、経済的、階級的観点から分析、文学的に結晶化させたもの。国際的視野を併呑し、西欧列強の覇権主義についても言及する。加えて、榎本なる人物を封建遺制の改革者と読み誤り民兵として奉じた<sup>（註16）</sup>「郷土」たちの没落という主題要素を作品に加味した。「五稜郭血書」は一貫、人物・榎本に批判的である。

榎本（酒をあおって）南京人には、南京人なりの扱い方がある。（砲撃つもの。正面の窓のむこうを、南京人の屍体二つ三つ、ばらばらと落ちて行く）

平山 さりとは、あまりに無慚なお取扱いではございませんか。何の罪咎もない非戦闘人を――

榎本 非戦闘人なればこそ、この目的に使役いたすのだ。戦闘人には、まだまだ最後の決戦が残っておる。

平山 しかし、閣下、今、わずかの落度より清国と事を構えましては――

榎本 馬鹿め。清国から抗議が出る時分には、天下は薩長の手に落ちていよう。江戸総督府を外国談判によって苦しめるという苦肉の策がわからぬか。

作品の冒頭から、榎本はこのように酷薄な人物として設定される。これは、子母澤「行きゆきて峠あり」が、同じ場面を、「敵の七十斤砲が五稜郭陣地のど真ん中に落下するので、これは奉行所の太鼓櫓が標的になっているに相違ねえ」というので松平太郎が榎本に話してすぐこれを切り崩させた」と描写して済ませたのとは対照的である。また、榎本の転向を描く以下の会話部分には明らかに、その転向の質を低く見積もる作者の意識の反映がある。

永山（薩長方） 明治の新政府は、貴殿ほどの開化思想の先覚者、海外新知識の人材にたいし、罪を問うことのみ汲々としてみだりにその多為なる前途を押し阻むような偏見狭量は持ちあわせませぬ。

榎本 ふむ。（うなづく。）

永山 どうであらう、榎本氏、もし恭順の意を表さるるならば、わが軍参謀黒田殿も、一身に代えて、貴殿の命乞いをいたされるそうなが。

榎本（無言。）

永山 百姓漁師というものは、野獣の仔にも等しいもの。軽々しく民兵を徴募して彼らに訓練を施すは、野獣の仔に人肉の味わいを知らしめるに異ならぬ。榎本氏、みずから陷穽を掘るような所行は、今をかぎりに改められてはどうか。

榎本 なるほど、これまでの降伏談判と事変わり、事理を尽したただ今の御説得によって、榎本、豁然として大悟いたしました。久保栄はまた、共和国政府内に跋扈する階級差別の実態を次のように描き出している。

平山（郷土） われら民兵は、榎本総裁の御指示によって差遣せられた者、総裁はじめ本丸詰の諸役人が、奥蝦夷へ落ちのびる手配を整えられるまでは、われらはこの台場を戦い守って敵の進撃をさえぎりとめます。

三郎助（佐幕派武士） 榎本総裁は、五稜郭において衆とともに決死籠城の覚悟をきわめておられるのだぞ。貴様らごとき民兵に、わが党謀策の根本がわかってたまるか。さ、引き取れ。五稜郭へ引上げい。

恒太郎（佐幕派武士） 行かぬか。馬鹿め。かまわん。民兵どもを追い払え。千代ヶ岡の砦を、百姓漁師の血をもつて穢すことは、浦賀同心隊の上なき恥辱だぞ。追い帰せ。

さらに、以下にみるように、封建遺制からの解放を希求する漁民に対する榎本の政治利用の意図というさらなる物語要素、その挿入と強調が「五稜郭血書」では行われている。

榎本 念のため確めておきたいが、もし漁場請負、問屋一手買いの悪法を改めるならば、その方らは、かならず一命をなげうってわが党のために尽瘁いたすな。



平山 申すまでもないこと。

榎本 平山、即刻、民兵総勢を糾合いたして、千代ヶ岡の守りにつけい。

物語はこれ以降、蜂起の中心人物であり、郷士<sup>ごうし</sup>の平山が、「命を的に榎本方の実権政府を守り立て、漁場取締りの悪法をかならず停止したすから、指図をするまでのみだりに立ち騒いではならぬ」と仲間漁師たちを宥め、榎本の仕掛けた陥穽にみすみす陥って行くありさまが描かれるのだが、榎本の本性が明らかになるのは、その僅か後のことであった。

平山 皆の衆、この平山は、お身方に合せる顔がない。許してくれない。幕府の施政にあきたらず、また薩長の新天下にあきたらず、幾たびか徒党を語らつて下民救済のために事を挙げながら、今、榎本の共和新政治の美名にまどわされて、いたずらに同士の血潮を流した罪は、何をもつてか償い得よう。たとえ幾たび、上に立つ者がかわろうとも、民百姓がわが手をもつておのれ等の難儀を救わぬかぎりには、決して世の不正不義は跡を絶たぬ。

頑冥な御家人を厄介払いするのにも榎本は同じ筆法、すなわち激戦地への転属を行った。

三郎助 (齒噛みをして) 榎本の残虐人め、われわれ親子の忠節をもてあそびおつたな。われわれ親子の決意堅しと見てとつて、偽つて人を死地に送り、その隙に白旗を掲げて敵に斂<sup>とく</sup>を通ずるとは、言語道断、実に見下げはてた所業だ。

恒三郎 かかる邪智佞奸の鼠輩<sup>そはい</sup>の口車に載せられて、むざむざ犬死を遂げるとは、面目が相立ちませぬ。

降伏直後の榎本は次のように描かれている。

榎本 種々御配慮の段、感佩<sup>かんぱい</sup>仕ります。ただ今、これへ参る途中、行く先々に横たわるわが党同志の屍を見て、ただただ、おのれの不覚を思い、そぞろ暗涙にむせびました。

永山 (周囲の屍体を指さして) さりとは、お心の弱い。この屍の上にこそ、明治御新政の礎が揺るぎなきく打ち立てられたのでござる。邦家百年の大計のために、臆する心なく、この屍の一つ一つを踏みしめて行かれない。

「五稜郭血書」には「附記」があり、「かならずしも、いわゆる「正史」に拠らず」と記されている。藩閥新政府の「官許」を得て、今日にまで引き継がれる「正史」の「正当性」、それに対する異議申し立てである。この「正史」の問題をめぐっては、しまね・きよしに、「維新の志士と呼ばれる二流・三流の人物の伝記までが、官的な部分のみを誇張した形でたくさん書かれたのたいして、幕府側の人物の伝記があまり書かれていないのは、新政府の差別政策にたいする無言の抵抗であつたかもしれない<sup>(注16)</sup>」との言がある。

久保栄は、現行の社会体制の礎が定められたこの時期を再検証することで、「ブルジョア演劇が自己の反動的役割を果すために好んで取り上げる題材<sup>(注17)</sup>」であつた従来の〈明治維新〉と、そこで繰り広げられてきた種々の「官許」〈維新史〉解釈に批判を試みた。「五稜郭血書」は、そのための具体的な創作実践である。

久保はこの戯曲において、具体的に次の三つの事柄に分析を加えている。第一には、久保の同時代——一九三〇年代の社会体制が、一八六〇年代のどのような政治的・経済的要因によって予め方向づけられたのかということ。また、民衆・郷士の階級的胎動を封ずる

ことを前提に、いかなる複教権力が談合・結託し、利害を共有したのかということ。第二には、帝国主義国家間の初度の植民地分割が完了し、極東のみが未分割でいた時期、国際情勢は、明治維新にどのような影響を与えていたのかということ。第三に、久保同時代の大衆にとって最も教訓を含んだこの〈維新〉という時期を、「全人類史の合法的発展の一環として描き出そう」とする場合、その歴史劇が、時代設定を〈現代〉に選んだ作品に劣らない直接的な意義と効果をもたらすためには如何にしたらよいかということ。

提出されたこれら三つの課題と、それらの解明のために指向された方向性とは、プロレタリア・リアリズムの理論に依拠した「模範的問題提起」として、また「模範的実践例」として作品内で機能している。久保は、同時期に行われた、「《座談会》『明治維新と文学』の座談会<sup>(註18)</sup>」においても、「唯物史観的な立場から過去の歴史的な事件を、全人類史の合法的発展の一つの環として描き出す」という右と全く同趣旨の発言をしている。この「座談会」に出席の、徳永直・大宅壮一・藤森成吉・貴司山治らの意見は、「歴史文学を生産する過程で歴史家と作家との協力」という点で一致しており、また、出席者に服部之總<sup>(註19)</sup>の名前が見えることから、「講座」派の理論がその光背として潜在することは明らかである。服部之總は後に、「郷士の運命と『五稜郭血書』の二十年<sup>(註19)</sup>」を執筆し、郷士の歴史的存在を「民主主義革命の経過的担当者」と規定した上で、フィクションの「中軸に、郷士と農民——漁民は海の農民、の關係いかんを基本課題として据えたこと」が、戯曲「五稜郭血書」に生命を与えた要因とする。

## 8 安部公房「榎本武揚」

### 8・1 作品の構造

安部公房の「榎本武揚」は、一九六四年一月から翌六五年三月にかけて「中央公論」に連載される<sup>(註20)</sup>。「榎本武揚」は、関連の深い二つの物語による、謂わば「入れ子構造」の作品である。〈内側の物語〉は、「五人組結成の顛末」という名の古文書の文章。内容は、「裏切り者・榎本の正体を暴く」もの。榎本の暗殺を企てた者が記したとされる。右の物語内物語を包摂する〈外側の物語〉は、歴史上の人物・榎本の「転向」を、かつて憲兵であった自身の免罪符に使用おうとする男性の物語。

### 8・2 榎本の転向

〈内側の物語〉の中で、獄中の榎本はおもむろに、五稜郭籠城が、佐幕主戦派の行動を封じ薩長有利を導くための「八百長戦争」であったのだと語り始める。榎本は、「これこそ國難を救う道だと、わが身をはげまし、はげまして思えばまったく、損な役目を引き受けさせられてしまったものさ」と韜晦する。

榎本 裏切りとは、ちと聞えが悪いな。僕が、勝先生に心服したのは、世間が勤王か佐幕かと騒いでおるときに、そのどちらでもない立場があることを、誰よりも先に見とおし、また実行されたからなのだ。

榎本は、士道はいまや、住み手のいないあばら屋も同然のもの、俄かに武士になった者が移り住んだとて、腐れた土台に変わりはないと言い、時代の変化を強調するのであった。

榎本 僕はこれまで、さんざん時代が変わったことを説いてきた。勤王でも、佐幕でもない、第三の道を進まなければならぬことを説いてきた。殿様連中が幅をきかせている、封建国家は、必然骨肉相食むという弱点を、西洋列国に巧みに利用され、骨の髄までしゃぶりつくされてしまうことになる。いまの日本に必要なのは、そんな殿様なんぞより、工業家なのだ。

固陋派切り捨てのために、「八百長戦争」を演出し、幕府が亡びたのち、「もともと僕は、誰に対しても、節を約束したおぼえなんぞ一度も無いのだから、変節したくも、しようがないじゃないか」と榎本に嘯かせる公房のこの作品は、正体のもとと知らない榎本という歴史上の人物を材料に、可能な限りのフィクションを盛ったものと言えよう。

### 8・3 元・憲兵の転向

「外側の物語」の語り手の一人である元憲兵・福地は、戦中に職務で遂行した他人への思想転向の強要を、戦後の自身のなし崩し再転向とともに、周囲から当てこすられている。福地は、「思想」を持つことはおろか、それについて考えることすら、憲兵という職においては危険なことであり、あつたとしてもそれはせいぜい「信念」くらいのものであったろうと語る。さらに、その「信念」にせよ、自分で拵えたものではなく、時代の信念に特に忠実だったということだけのことで、責任を取らされるのでは割に合わないと言うのだ。

福地 時代が変わって、それまでの信念を否定するのだから、やはり新しい時代の、同じ信念じゃありませんか。いつだって、正しいのは、その時代の信念だけなんだ。時代を信じることを自

体が、罪になるような時代でも来ないかぎり、いくら過去を恥じると言われても、そいつは無理というものですよ。

元憲兵という横糸と、榎本をめぐる縦糸、この二本の糸で、「無罪証明のための弁明書」という一枚の布を織り上げることが可能ならば、それでよかつたのだ。横糸があまりに現実的であるのに、縦糸の方はあまりに空想的要素が強過ぎるといふ憾みがあるのだが。

福地 どうしても過去の非を認めると言われるのなら、では、忠誠そのものを罪悪であるとみなすような制度をば、制定していただきたい、と、こう私は申し上げるしかないであります。

### 8・4 安部公房の転向

「節を約束したおぼえなんぞ一度も無いのだから、変節したくも、しようがないじゃないか」、あるいは、「節をまっとうするは、至難の業なり。されど節を捨てるは、さらに至難の道なり」など、公房「榎本武揚」の作品言説には、歯切れが良いように、その実、積然としないものが何時までも纏わり附いている。公房は、作品評として、ある者からは、「榎本批判に形をかりた、榎本擁護の説であるとのしられ」、別の者からは、「榎本擁護と見せかけた、榎本批判がねらいだと腹を立てられ」るなど、「相反する立場から、しかしきわめて似通った情緒反応を示されたのだ」という。これは一面で、作品の破産を意味していまいか。

〈守節〉という事柄を相対化すること、それを通じて、あらゆる〈思想〉を相対化すること、その無限運動のなかで、人間の實質に就いた何か生産的なものは果して生れるのだろうか。何もかもを相対化し尽くそうとする言動が、時代の支配的風潮を黙認・助長するこ

とに繋がることはないのか、繋がっていたということがこれまでなかったか。

節そのものの否定が、変節のすすめとして横行しつつある今、この安部の榎本像は、どこでそれらの動向と自己を区別できるのか？ 安部はこの作でそれに答えてはいない。現代との緊張関係がこの作者には決定的に欠落しているのではないか。この疑問が、不快な緊張を強いるのである。

（武井昭夫「危機意識の欠落」<sup>（註22）</sup>）

公房は、元憲兵・福地に、「時代や、制度を、自分勝手に選べるほどの者でないかぎり、ひいた籤<sup>くじ</sup>は、全部外れときめられているのか」と言わせている。

なぜ、安部が榎本武揚をこうした形でかかねばならなかったのか、と。これは、安部公房のアリバイづくりなのだ。小説「榎本武揚」は現代の転向問題を扱った、新しい型の転向文学だということ、私は指摘しておきたいと思う。

（「危機意識の欠落」<sup>（註23）</sup>）

竹内実は、公房の転向観を次のように見定める。「『時代』というメガネ」なるニュートラルな媒介項を公房が指定することで、「『時代』はほとんど〈自然〉現象のように発音され、したがって、主体（人間）の働きかけとは無関係になる。転向の無罪の論理は、時代と忠誠をセットにするところから可能になっている」<sup>（註24）</sup>「文芸時評」と。

すべては相対的であって、時代が新しくかわれば、それに対応して人間は生きていけばいい（というほど）それほど単純な存在ではありえない。転向・非転向の問題は、明快な論理によつては処理されない人間の内的な痛みをとまなう

（松原新一「安部公房と転向論」<sup>（註25）</sup>）  
ドナルド・キーンは、文庫版「榎本武揚」の「解説」<sup>（註26）</sup>において、「転向が悪いと思つたら悪くなるが、それはある場合には自己保存の手段として必要であるばかりでなく、社会全体が要求することが多い。絶対に転向しない人に会うと、場合によっては滑稽であり、場合によってはみじめである」と語る。キーンにおいても、転向者の、あるいは非転向者の「内的な痛み」は「他人事」なのであろうか。

榎本が後年、久保栄の「五稜郭血書」によつて、こんどは左翼の見地から、やはり裏切り者として激しい攻撃をうけ、また戦後には、銅像撤去審査委員会から、とくに撤去の必要なしとの扱いを受けたという、このいささか皮肉な事実への注目をうながしておきたいと思うのだ。思想と行動との関係を、その具体的な内容に即してとらえようとはせず、もっぱら忠誠は善、転向は悪と割り切ってしまう、明治以来の伝統的美徳だけは、どうやら左右を問わず、いまだに健在のまままで生きのびているらしいのである。忠誠でもなく、裏切りでもない、第三の道というものはありえないのだろうか。

（安部公房「幕末・維新の人々」<sup>（註27）</sup>）

キーンは、公房「榎本武揚」を読了して、「榎本の頭の中には、転向や裏切りを超越するようなものがあつたにちがいない。それがどんなものだったかは、わからない」と述べている。公房が指定する「第三の道」とは、一体「どんなものだった」のか。

思想や転向を相対化する「意義」に自覚的になること、さらにそれを作品に形象化しようとする目的意識、それらは公房の内心の何



を原因に生じたのか。五六年、公房はチェコスロバキア作家同盟の招聘で、新日本文学会の代表としてプラハを訪問する。帰国後に上梓した旅行記『東欧を行く——ハンガリア問題の背景』(五七年二月)は、日本共産党の「批判」を受けた。六二年には、除名の処分。思想「相対化」の契機は、ソヴィエト・ロシアの「覇権主義」を目の当たりにしたこと、党からの除名処分とその要因があっただろう。

## 9 佐幕・転向・プロレタリアリアリズムをめぐる物語

子母澤寛「行きゆきて峠あり」、久保栄「五稜郭血書」、安部公房「榎本武揚」の三作品はいずれも、戊辰箱館戦争、人物・榎本武揚を題材に採りながらも、その創作意図は全く異なるものであった。「行きゆきて峠あり」は、佐幕派の流離・零落が、作者の「情」によって描かれた。「五稜郭血書」は、プロレタリア・リアリズムへの作者の「政治的リゴリズム」から生れた。「榎本武揚」は、政治的原理主義を無力化するために、転向にまつわる従来の思想・思索を「パラダイムシフト」することを目的に創作された。

しかし、今ふたたびそれぞれの作品を閲し、さらにその相互比較の中で見えてくるのは、日本の「近代」が抱え持つ未解決の諸課題、そのすべてが、文学にそのまま持ち越されて来ているという姿である。

「行きゆきて峠あり」は、政治や社会の問題が、その領域内のみで解決・解消されず、あたかも「歴史」に対する人間の大きな恨みのようなものを構成するということを教える。アナクロニズムと笑うのは容易い。しかし、近代日本の歴史や社会に生きる人間を、「情」や「判官墨痕」あるいは「頑民の悲哀」などという言葉を用い

ずに語ることでできるメンタリティを日本人は既に獲得している、などと果して言い切れようか。

「五稜郭血書」は、コミンテルン・三三二テーゼ(一九三二年)の影響下、「講座」派理論援用の中で、マニユファクチュア論争を主軸に展開された〈維新〉にまつわる諸論議の分りやすいタブローとなっている。そしてこれも又、奈良本辰夫の「最近の明治維新論をめぐって」<sup>(註28)</sup>、「明治維新革命の主体性について」<sup>(註29)</sup>などを経つつも、これまで決着のついたためしない、「日本の近代とは」という原初的難問を提起し続けているのだ。

公房「榎本武揚」の創作意図は、「維新期の転向」を事例に、「近代の転向」という陰面を浮び上がらせようとする所に、その獨創性が探られたのであろう。しかし顧みれば、時代の相前後する複数の「転向」を擬え合せようとする思索の方法は、前大戦中に既に見られた傾向ではなかっただろうか。一例を挙げたい。一九四二年一〇月、歴史学者・田村栄太郎は『川路聖謨』<sup>(註30)</sup>を上梓するが、その「序」において、榎本批判の書でもある福沢諭吉「瘦我慢の説」を引見しながら川路と勝海舟を比較し、海舟批判を展開している。田村は文中、臣節を全うすべく自殺した川路左衛門尉聖謨を、道徳的に一貫した、教訓となる人物と同定する。おりから田村は戦時弾圧下に転向を迫られていた。非転向を貫いた幕臣の擧<sup>ま</sup>げ<sup>な</sup>ら<sup>ぬ</sup>こと<sup>で</sup>、「完全転向にたいする内面の制禦装置をつくった」<sup>(註31)</sup>のである。転向如何の細い一線上を辛くも踏み渡らざるを得ない戦中の思索者のメンタリテイは、右にみるように、維新期の幕臣の処世を自身の内心と重ね合わせることで一定の指標を得もし、また慰安されもしたのである。公房は作品で、二つの時代の「転向」を併置した。〈維新〉期のそれ



と、戦中・戦後のそれとを。しかし、公房にとつての本来の主要関心事とは、自身の「今現在」の思想転向についてであつただろう。公房本人をも当事者の一人とする、「現代史的展開の中にある転向」の問題である。小説「榎本武揚」創作には、〈維新〉期の転向者、戦中・戦後期の転向者とも比況されるころの、党と離党者たる自身の関係性の同時代史的追究ということが潜在的に意図されてはいなかつたか。

しかし、文学の想像力というものは本来、これら三作品よりもさらに先が目指されねばならぬだろう。「感情移入」や「擬え」、手妻の割れた「思想相対化」などとは一線を劃し、政治に伍して、ポリティカルな面における高度な判断力を涵養することこそが必要ではないか。例をとつて具体的に言うならば、幕末にあつて、〈恭順論〉すらもはや、未来への見通しに立った意識的理論を要求されるものであつた。幕閣の実務インテリは、大政奉還後の家臣たちの生活までも考慮に入れなければならなかつた。しまね・きよしは、「幕末維新における幕臣」<sup>(註32)</sup>で、「瓦解後の幕臣の身の振り方を次の三つの型に分類する。① 新政府に出仕する者、② 新たに実業家・ジャーナリストの職を選ぶもの、③ 隠退する者。この三つのなかで、福沢諭吉は、在野グループ・隠遁グループの代表であり、勝海舟は出仕グループ・隠遁グループの代表であつた。主戦論者は、榎本武揚グループを通じて新政府に参加、海舟は、主戦論者を自分のルートから排除したとされる。転向とその帰趨はこのように、さらに多層・複雑化しているのである。これらの歴史事象を文学に形象化した現代の作品はあつたのか。またそれを描き得た文学者は既いたであらうか。

幕末・維新をめぐる物語は、一方で史実に徴することを不可欠としつつ、他方で、フィクションを極めるというには、いまだ大きな<sup>ぎんげつ</sup>残闕を余している。

### 【註】

- (1) 『アイヌ文学』 知里真志保 元々社 一九五五年三月
- (2) 「近代文学における地方性の問題」 和田謹吾 「ふじ」一九五四年三月
- (3) 「北海道の作家たち」 中野重治 「文学」一九六七年二月
- (4) 「悲劇的精神系譜」の探求を」 山田昭夫 「北海タイムス」一九六〇年六月二日
- (5) 「文学的自叙伝」 島木健作 「新潮」一九三七年八月
- (6) 「北の詩精神」 風巻景次郎 「短歌研究」一九五五年三月
- (7) 「四十度圏の幻想」 風巻景次郎 「北海道大学新聞」一九四七年一月一日
- (8) 「北海道文学の系譜」 亀井勝一郎 「読売新聞」一九五四年八月一六日
- (9) 「函館八景」 亀井勝一郎 『統隨筆北海道』 青磁社 一九四七年二月
- (10) 『榎本武揚——明治日本の隠れたる礎石』 加茂儀一 中央公論社 一九六〇年九月
- (11) 「蝦夷物語——或る二人の敗走者——」 子母澤寛 『別冊文藝春秋』一九五八年八月 『蝦夷物語』 中央公論社 一九六〇年四月
- (12) 「鶴沼閑話」 尾崎秀樹 『子母澤寛——人と文学』 中央公論社 一九五二年五月
- (13) 『子母澤寛の年輪』 尾崎秀樹 『子母澤寛——人と文学』 中央公論社 一九五二年五月
- (14) 『行きゆきて峠あり』 子母澤寛 読売新聞社 〈上巻〉六七年三月 〈下

- 卷〕六七年六月
- (15) 『五稜郭血書』 久保栄 白揚社 一九三四年六月
- (16) 「幕末・維新における幕臣」 しまね・きよし 『共同研究 明治維新』 思想の科学研究会編 徳間書店 一九六七年一月
- (17) 「五稜郭血書」 覚え書」 久保栄 「築地小劇場」 一九三三年六月
- (18) 『座談会』 「明治維新と文学」 座談会」 「歴史科学」 一九三三年八月 白揚社
- (19) 「郷士の運命と「五稜郭血書」の二十年」 服部之總 「民芸の仲間」 一九五二年一月 『服部之總全集』 第二二卷 福村出版 一九七四年五月
- (20) 『榎本武揚』 安部公房 中央公論社 一九六五年七月
- (21) 「榎本武揚」 について」 安部公房 「中央公論」 一九六七年一〇月
- (22) 「危機意識の欠落」 武井昭夫 「新日本文学」 一九六六年二月
- (23) 「危機意識の欠落」 武井昭夫 「新日本文学」 一九六六年二月
- (24) 「文藝時評」 竹内実 「新日本文学」 一九六五年一月
- (25) 「安部公房と転向論——二つの「榎本武揚」」 松原新一 「國文學」 一九七二年九月臨時増号
- (26) 「解説」 ドナルド・キーン 『榎本武揚』 中公文庫 一九七三年六月
- (27) 「幕末・維新の人々」 安部公房 「東京新聞」 一九六四年六月六日夕刊
- (28) 「最近の明治維新論をめぐって」 奈良本辰也 「現代の理論」 一九六五年一月
- (29) 「明治維新革命の主体性について」 奈良本辰也 「潮流」 一九七四年一月
- (30) 『川路聖謨』 田村栄太郎 日本電報通信社 一九四二年一〇月
- (31) 「幕末・維新における幕臣」 しまね・きよし 『共同研究 明治維新』 思想の科学研究会編 徳間書店 一九六七年一月
- (32) 「幕末・維新における幕臣」 しまね・きよし 『共同研究 明治維新』 思想の科学研究会編 徳間書店 一九六七年一月



## Literature of Boshin Hakodate Goryokaku Castle

— The Story of Adherence to the Shogunate, Conversion, and Proletarian Realism —

KONO, Motoki

北海道の文学は、大地への畏敬が表現されたネイティブの口承文芸に唱道され、下っつては、日本古典の〈歌枕〉としてその名が親炙されるなど、既に長い歴史を刻んでいるが、近代に至っても、『北海道文学全集』に集大成された数々の作品に見るように、その豊穡は明らかである。

この北海道の地にあつて、近代の黎明期から早くも通商外交上の役割を担い、外国に向けて穿たれた数少ない文化の窓ともなったのが、道南の港町・函館の存在である。国際港としての開明的な性格から、進取の気風溢れる文学揺籃の地であったが、他方では、戊辰戦争終結の土地柄から、ここを舞台とするさまざまな歴史文学が生み出されている。

幕末・維新史はこれまで、官許の〈正史〉がその史観を規定してきた。したがって、それ以外の近代日本史学の企ては、在野の歴史家はもとより、文学者によっても構想・実践されてきた。箱館共和国政府についての政体理解、共和国政府総裁・榎本武揚についての人物評価、五稜郭攻防の帰趨をめぐり、これまで書かれてきたたくさんの小説や戯曲は、文学的フィクションを一旦通過した、日本近代史再解釈の試みといえよう。

当該論では、子母澤寛「行きゆきて峠あり」、久保栄「五稜郭血書」、安部公房「榎本武揚」を事例に、作者各々の歴史観、作品それぞれの歴史解釈とその相違、さらには、相違の理由を明らかにする。